

2021 年度 2・3・4 年次アンケート

本学では、毎年 4 月のオリエンテーション時に、新 2 年次、新 3 年次、新 4 年次を対象とした「教育・学生生活に関するアンケート調査」（以下「在学生アンケート」と表記）を行っている。今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響によりオリエンテーションがオンラインで行われたため、4 月から 6 月にかけて対面授業の際に在学生アンケートを行った。遠隔授業のみ履修の対象学生には、郵送回答とした。このアンケート調査は、在学生が本学の教育内容や学生生活についてどのような意識を持っているのか、また本学学生の学習実態などを明らかにすることで、今後の教育改善に活かすことを目的としている。本報告書では、主な項目の分析結果を中心に報告する。なお、回答人数が少なくかつ旧課程の専攻である史学専攻（6 名）、英語文学文化専攻（10 名）、言語科学専攻（2 名）は、分析の対象から除いた。

調査概要は以下の通りである。

目的：東京女子大学に通っている学生の学習及び大学生活に関する意識・実態調査

方法：質問紙調査

対象：東京女子大学に在籍している 2～4 年次学生、2903 名（5 月 1 日時点、休学者は含む）

（うち：2 年次学生 894 名、3 年次学生 938 名、4 年次学生 1071 名）

調査期間：2021 年 4 月 14 日～2021 年 6 月 11 日

有効回答数：2404 名

（うち：2 年次学生 827 名、3 年次学生 768 名、4 年次学生 808 名、学年不明 1 名）

有効回答回収率：82.8%

（うち：2 年次学生 92.5%、3 年次学生 81.9%、4 年次学生 75.4%）

調査項目：2020 年度までに実施してきた調査結果を踏まえ、「学習」、「新型コロナウイルス感染症」、「学生生活」、「図書館」、「課外・学外の活動」、「その他」などの項目で構成している。

本報告書では、2 年次、3 年次、4 年次などの表記が出てくるが、在学生アンケートは、年度初めに実施しているため、例えば、2 年次の授業に対する満足度は、当該学生が 1 年次であった時の授業の満足度を示す。同様に、3 年次の授業に対する満足度は当該学生が 2 年次であった時の授業の満足度、4 年次の授業に対する満足度は当該学生が 3 年次であった時の授業の満足度のことである。

また、本報告書で用いるデータは全数調査によるものなので有意確率（p 値）は報告せず、平均値・標準偏差および効果量（ η^2 ）のみを報告する。なお、 η^2 については、Cohen(1988)の基準 $\eta^2 = .01$ (small)、 $\eta^2 = .06$ (medium)、 $\eta^2 = .14$ (large) を用いた。

なお、参考のため過去 5 年間の回収率（2～4 年次学生全体）を表 1 に示しておく。

表 1 年度別に見た 2～4 年次アンケートの回収率

2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度 (Web 調査)	2021 年度
82.8%	83.2%	84.3%	84.9%	70.0%	82.8%

(1) 授業に対する満足度について

「授業全般」、「全学共通カリキュラムの科目の授業」、「学科科目（専門）の授業」の3つのカテゴリー別に、過去1年間の学修を通じての授業の満足度を尋ねたところ、表2のような結果となった。「大変満足している」、「満足している」、「どちらかと言えば満足している」の3つを全体した割合は、「全学共通カリキュラムの科目の授業」、「学科科目（専門）の授業」で8割を超え、「授業全般」でも8割近いことから、授業に対する満足度は全般的に高いと言える。しかしながら、例年本設問は全ての項目で9割近くが肯定的な回答であることに鑑みると、今年度は満足度が若干低くなったと言える。これは新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、年間を通して対面授業がほぼ出来なかったためであると考えられる。

表2 授業に対する満足度

	全く満足 していない	満足 していない	どちらか と言えば満足 していない	どちらか と言えば満足 している	満足 している	大変満足 している	履修 していない
	% (n)	% (n)	% (n)	% (n)	% (n)	% (n)	% (n)
授業全般	0.9 (21)	4.6 (107)	15.5 (359)	34.6 (801)	37.1 (859)	7.3 (170)	
全学共通 カリキュラムの 科目の授業	0.6 (15)	3.5 (82)	14.6 (338)	37.6 (868)	35.5 (820)	7.1 (164)	1.0 (24)
学科科目 (専門)の授業	0.7 (17)	3.0 (69)	12.2 (281)	30.7 (709)	40.0 (924)	13.0 (301)	0.4 (10)

注：各項目について欠損値（69人～75人）を除いて集計した結果である。

授業に対する満足度を専攻別、学年別に比較するため、まず「大変満足している」=6、「満足している」=5、「どちらかと言えば満足している」=4、「どちらかといえは満足していない」=3、「満足していない」=2、「全く満足していない」=1と点数化し、それぞれの項目の平均値および標準偏差を算出した（表3～表8）。

表3～表5は、専攻別に見た、授業に対する満足度に関する6項目の平均値および標準偏差を示している。全ての項目かつ専攻で、授業満足度の平均値が4.0以上となった。効果量を見ても、専攻による大きな違いは見られない。

表3 専攻別に見た「授業全般」に対する満足度

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.22	1.055	318	$\eta^2 = .017$
哲学	4.37	1.150	93	
日本文学	4.40	0.978	236	
歴史文化	4.01	1.047	208	
国際関係	4.15	0.995	292	
経済学	4.29	1.031	209	
社会学	4.33	0.963	129	
コミュニティ構想	4.23	1.071	137	
心理学	4.49	0.898	210	
コミュニケーション	4.13	1.002	302	
数学	4.12	0.877	98	
情報理学	4.33	0.998	84	
合計	4.24	1.014	2316	

表4 専攻別に見た「全学共通カリキュラムの科目の授業」に対する満足度

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.21	0.985	318	$\eta^2 = .008$
哲学	4.29	1.109	93	
日本文学	4.32	1.068	235	
歴史文化	4.05	1.119	209	
国際関係	4.14	1.091	291	
経済学	4.30	1.004	207	
社会学	4.38	0.922	128	
コミュニティ構想	4.26	1.113	135	
心理学	4.27	1.047	211	
コミュニケーション	4.14	1.035	301	
数学	4.10	1.108	98	
情報理学	4.33	1.010	84	
合計	4.22	1.051	2310	

表5 専攻別に見た「学科科目（専門）の授業」に対する満足度

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.28	1.120	318	$\eta^2 = .026$
哲学	4.54	1.119	93	
日本文学	4.69	1.030	235	
歴史文化	4.26	1.041	210	
国際関係	4.33	1.061	291	
経済学	4.44	1.026	207	
社会学	4.59	0.865	128	
コミュニティ構想	4.50	0.961	135	
心理学	4.77	1.065	212	
コミュニケーション	4.38	1.052	300	
数学	4.23	0.907	97	
情報理学	4.37	1.015	84	
合計	4.44	1.051	2310	

表6～表8は、学年別に見た授業に対する満足度の平均値および標準偏差である。授業満足度に関する全ての項目において、4年次生の満足度が最も高くなった。しかし、効果量を見ても分かるように学年間にさほど大きな違いは見られない。

表6 学年別に見た「授業全般」に対する満足度

学年	平均値	標準偏差	人数	効果量
2年次	4.00	1.022	804	$\eta^2 = .035$
3年次	4.28	1.003	740	
4年次	4.46	0.961	772	
合計	4.24	1.014	2316	

表7 学年別に見た「全学共通カリキュラム」に対する満足度

学年	平均値	標準偏差	人数	効果量
2年次	4.05	0.977	804	$\eta^2 = .015$
3年次	4.25	1.058	740	
4年次	4.36	1.095	766	
合計	4.22	1.051	2310	

表8 学年別に見た「学科科目（専門）の授業」に対する満足度

学年	平均値	標準偏差	人数	効果量
2年次	4.24	1.026	804	$\eta^2 = .027$
3年次	4.44	1.078	740	
4年次	4.65	1.009	766	
合計	4.44	1.051	2310	

次の図1～図3では、授業満足度について、学年別および学科別の違いを同時に示しておく。授業満足度に関する3項目いずれにおいても、学科によらず、4年次には、2年次と比べて満足度が高くなっている。

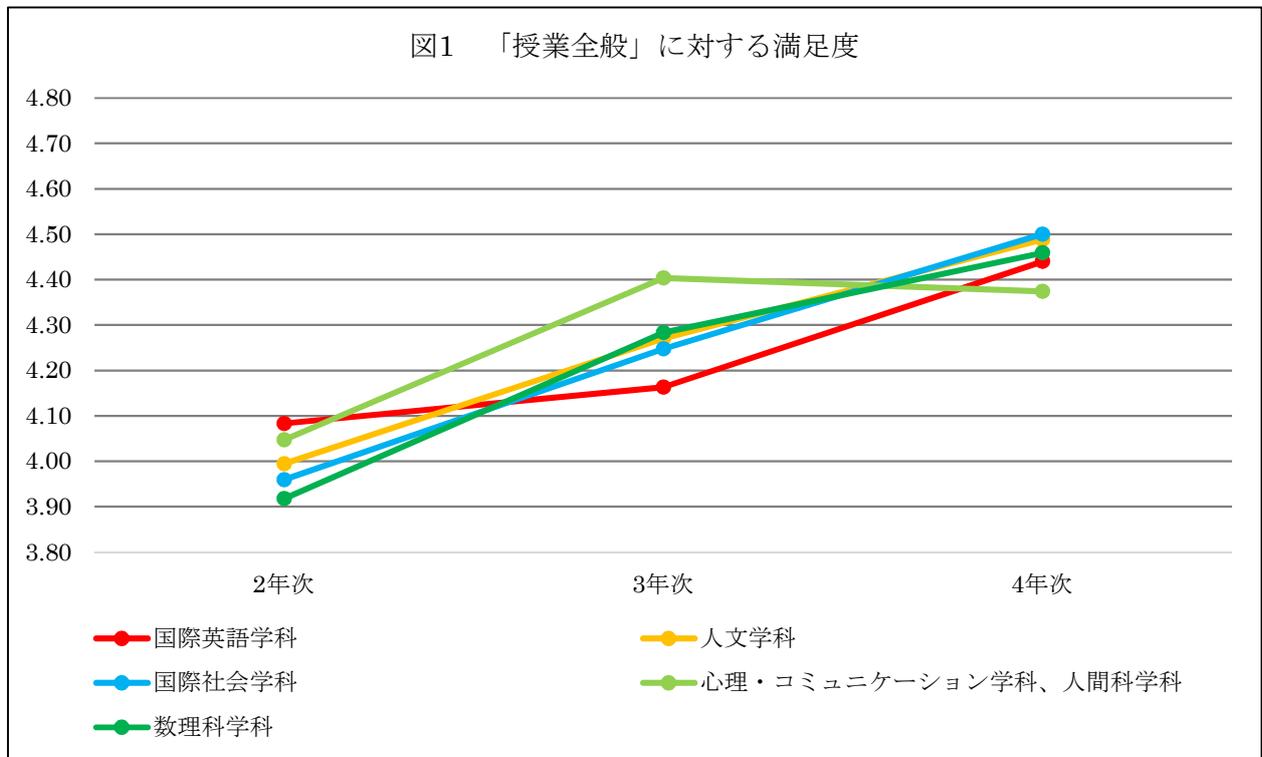


図2 「全学共通カリキュラムの科目の授業」に対する満足度

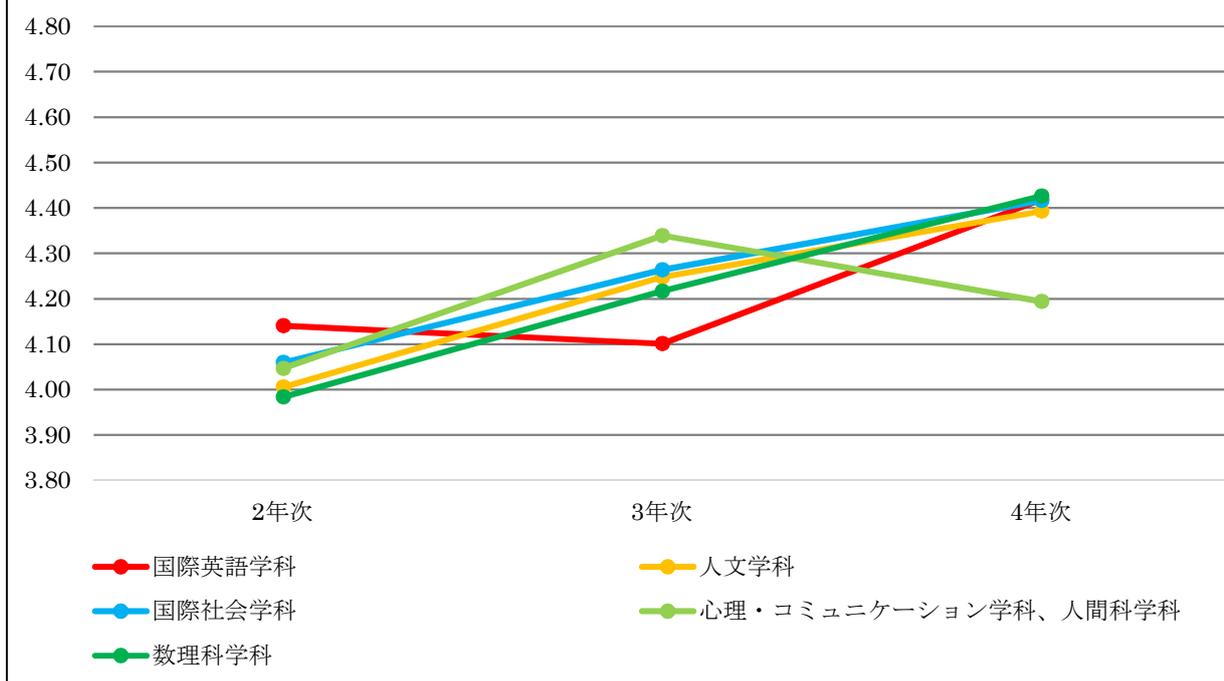
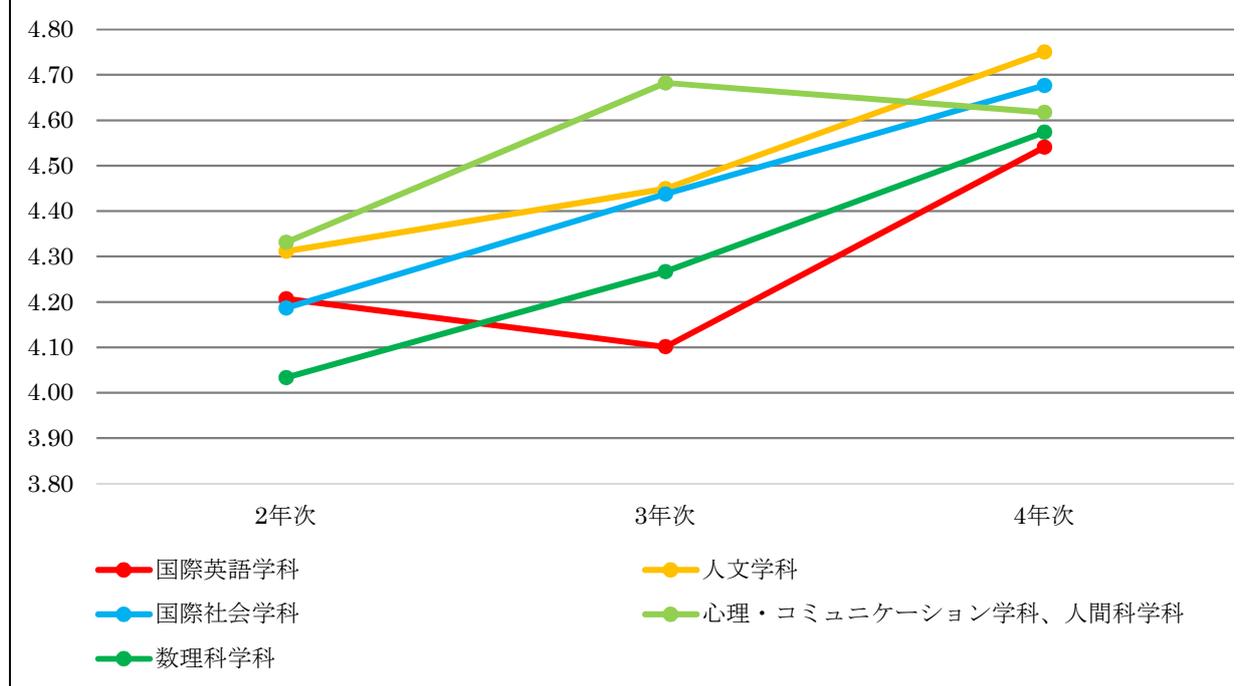


図3 「学科科目（専門）の授業」に対する満足度



(2) 身についたスキルに関する項目の集計・分析結果

「昨年1年間の学びを通じてどのようなスキルを身につけることが出来たと思うか」を調べるため、「学術的な文献の読解力」、「人の話を聞いて、要点をつかむ力」、「プレゼンテーションにおいて、効果的に話をする力」、「ディスカッションにおいて、論理的に意見を述べる力」、「論理的でわかりやすい文章を書く力」、「わかりやすいプレゼンテーション資料を作成する力」、「パソコンで図表を作成する力」、「課題に応じて、適切な資料を収集する力」、「相手や場面に応じたコミュニケーション力」、「グラフや表で示された統計資料を理解する力」の10項目について、「全くそう思わない」(=1)から「非常にそう思う」(=6)の6件法で尋ねた。

その結果が図4である。「人の話を聞いて、要点をつかむ力」、「課題に応じて適切な資料を収集する力」の2項目は、「非常にそう思う」「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の肯定的な回答が、昨年に引き続き8割を超えている。その他の項目でも、肯定的な回答が6割を超えており、多くの学生がこれらのスキルを身につけることができたと考えている事が分かった。

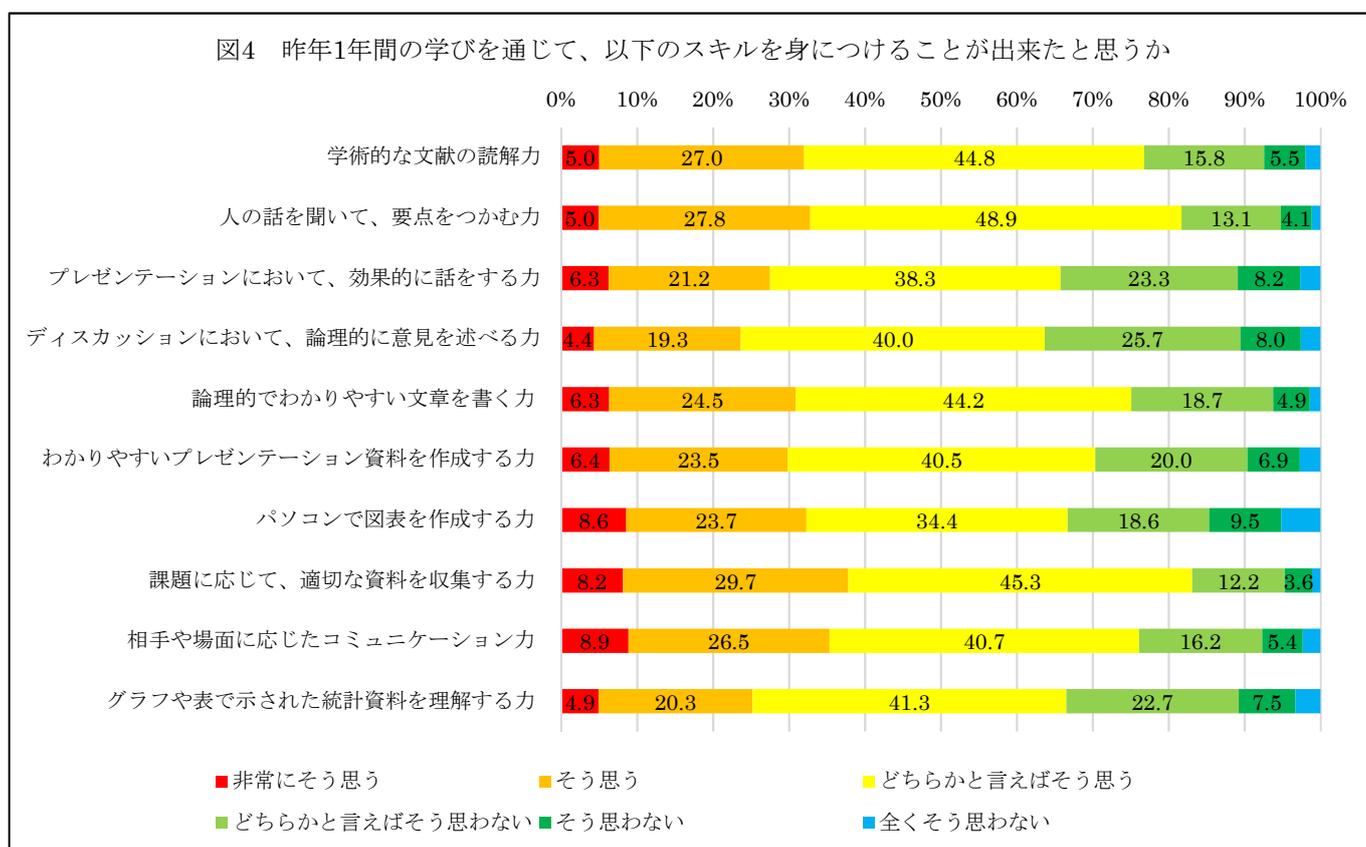


図4に示す10項目について、得点を合計しそれを項目数で割った項目平均を算出し、「スキル総合得点」(M=3.98、SD=0.778、最大=6、最小=1；因子分析で次元性も確認。 $\alpha = .900$)として、以降の分析に使用した。

専攻別にスキル総合得点を見ると（表 9）、平均値が最も高い専攻で M=4.24、最も低い専攻で M=3.68 となった。効果量は小さく ($\eta^2 = .025$)、専攻間におけるスキル総合得点の違いは大きくはない。しかし、平均が 3 点台の専攻が大半なため、授業内でのディスカッションやプレゼンテーションの機会等を積極的に取り入れるなどして、汎用的なスキルの向上に努めたい。

表 9 専攻別に見た「スキル総合得点」

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.04	0.816	329	$\eta^2 = .025$
哲学	3.87	0.862	95	
日本文学	3.98	0.711	238	
歴史文化	3.87	0.742	213	
国際関係	3.95	0.700	301	
経済学	3.95	0.796	209	
社会学	4.05	0.704	134	
コミュニティ構想	4.14	0.803	140	
心理学	4.24	0.670	213	
コミュニケーション	3.91	0.794	311	
数学	3.68	0.951	99	
情報理学	3.90	0.846	86	
合計	3.98	0.778	2368	

スキル総合得点を学年別に見ると、表 10 の結果となった。学年別では、4 年次のスキル総合得点が他学年より高い。効果量は小さく ($\eta^2 = .020$)、学年間におけるスキル総合得点の違いは大きくない。

表 10 学年別に見た「スキル総合得点」

学年	平均値	標準偏差	人数	効果量
2 年次	3.91	0.735	824	$\eta^2 = .020$
3 年次	3.90	0.752	759	
4 年次	4.14	0.824	785	
合計	3.98	0.778	2368	

(3) 身についた能力に関する項目の集計・分析結果

昨年1年間の学びを通じて、以下の図5に示される14項目の能力を身につけることが出来たと思うかどうかを尋ねた結果を示す。ほとんどの項目で肯定的な意見が7割を超える結果となった。「率先してグループをまとめリードする力」の肯定的な意見は他と比べて低くなっているが、これは新型コロナウイルス感染拡大の影響により、実感する機会が少なかったことが一因であると考えられる。オンラインであってもグループワークの機会を十分に確保するなどの方策を検討する必要がある。

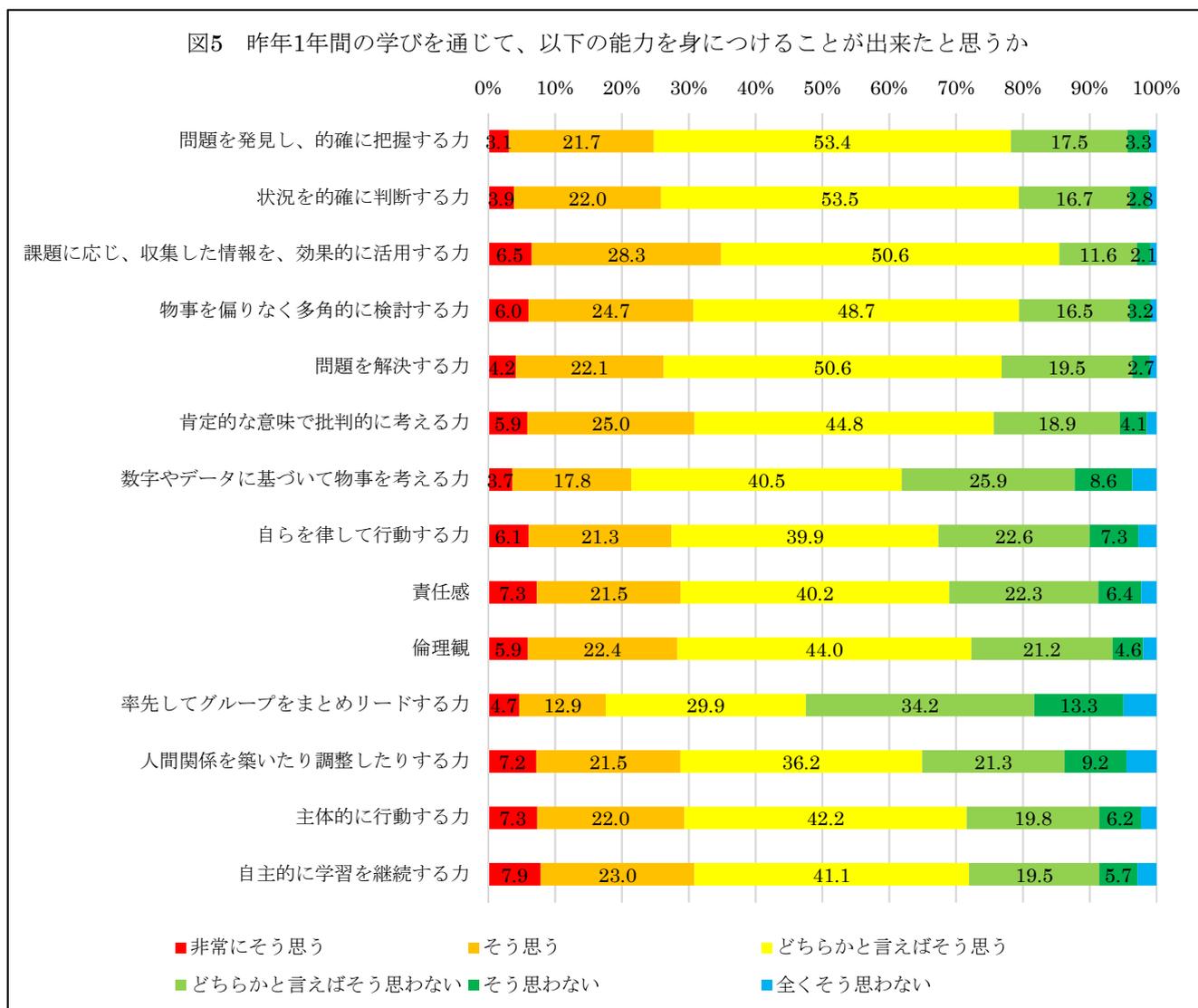


図5に示す14項目についても、得点を合計しそれを項目数で割った項目平均を算出し、「能力総合得点」(M=3.94、SD=0.733、最大=6、最小=1、因子分析で次元性も確認。α=.927)として以降の分析で用いた。

能力総合得点を専攻別に見ると（表 11）、最も高い専攻でM=4.06、最も低い専攻でM=3.82であった。しかし効果量は小さく（ $\eta^2 = .011$ ）、専攻間の差はさほど大きくないことがわかる。

能力総合得点を学年別で見た場合（表 12）、学年が上がると能力総合得点も高くなる事がわかる。こちらも効果量は小さく（ $\eta^2 = .037$ ）、学年間の差は殆ど見られない。

表 11 専攻別に見た「能力総合得点」

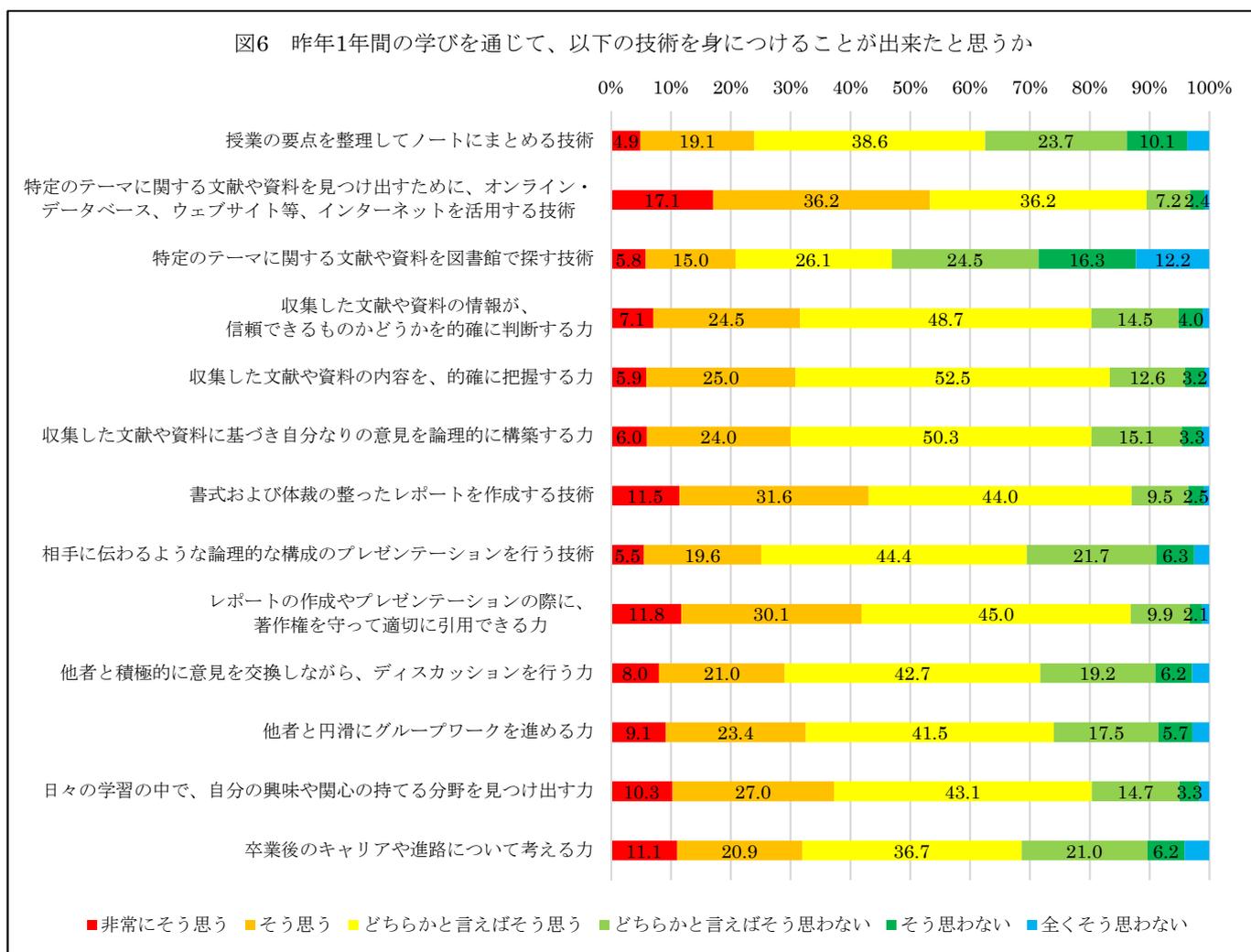
専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.00	0.796	329	$\eta^2 = .011$
哲学	4.02	0.814	93	
日本文学	3.92	0.647	235	
歴史文化	3.87	0.673	213	
国際関係	3.92	0.675	299	
経済学	3.89	0.777	208	
社会学	4.04	0.673	134	
コミュニティ構想	4.06	0.735	140	
心理学	4.05	0.724	213	
コミュニケーション	3.82	0.754	310	
数学	3.91	0.814	99	
情報理学	3.93	0.701	86	
合計	3.94	0.733	2359	

表 12 学年別に見た「能力総合得点」

学年	平均値	標準偏差	人数	効果量
2年次	3.81	0.709	820	$\eta^2 = .037$
3年次	3.89	0.682	758	
4年次	4.14	0.765	781	
合計	3.94	0.733	2359	

(4) 身についた技術に関する項目の集計・分析結果

図6は、昨年1年間の学びを通じて身につけることができたと思う技術13項目の分析結果である。半数以上の項目で、肯定的な回答の割合が8割を超えた。「特定のテーマに関する文献や資料を図書館で探す技術」は肯定的な回答が5割を満たなかったが、これは新型コロナウイルス感染症拡大により、大学の図書館が自由に使えなかったことが一因であると考えられる。



前述 13 項目のうち、因子分析結果が 0.4 未満だった「授業の要点を整理してノートにまとめる技術」「特定のテーマに関する文献や資料を図書館で探す技術」「日々の学習の中で、自分の興味や関心の持てる分野を見つけ出す力」「卒業後のキャリアや進路について考える力」を除く 9 項目に対して「非常にそう思う」=6、「そう思う」=5、「どちらかと言えばそう思う」=4、「どちらかと言えばそう思わない」=3、「そう思わない」=2、「全くそう思わない」=1 として、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った結果を表 13 に示す。

表 13 昨年 1 年間の学びを通じて、身につけることができたと思う技術に関する項目の因子分析結果
(最尤法、プロマックス回転)

	F1	F2	共通性
情報探索・処理に関する能力や技術 ($\alpha = .898$)			
収集した文献や資料の内容を、的確に把握する力	0.936	-0.079	0.797
収集した文献や資料の情報が、信頼できるものかどうかを的確に判断する力	0.853	-0.065	0.668
収集した文献や資料に基づき自分なりの意見を論理的に構築する力	0.786	0.040	0.654
特定のテーマに関する文献や資料を見つけ出すために、オンライン・データベース、ウェブサイト等、インターネットを活用する技術	0.719	-0.027	0.495
書式および体裁の整ったレポートを作成する技術	0.655	0.104	0.518
レポートの作成やプレゼンテーションの際に、著作権を守って適切に引用できる力	0.608	0.153	0.500
学生生活スキル ($\alpha = .838$)			
他者と積極的に意見を交換しながら、ディスカッションを行う力	-0.044	0.955	0.866
他者と円滑にグループワークを進める力	-0.018	0.860	0.722
相手に伝わるような論理的な構成のプレゼンテーションを行う技術	0.371	0.418	0.492
相関係数	0.577		

第 1 因子は、「収集した文献や資料の内容を、的確に判断する力」、「収集した文献や資料の情報が信頼できるのかどうか的確に判断する力」など、課題を進めるにあたって必要な能力に関する項目が多かったため、この因子は「情報探索・処理に関する能力や技術」を表わすものと解釈できる。また、第 2 因子は、「他者と積極的に意見を交換しながらディスカッションを行う力」、「他者と円滑にグループワークを進める力」といった、学生生活を送る上で必要な項目に因子負荷量が高かったため、この因子は「学生生活スキル」を表わすものと解釈した。

以降の分析では、これら 9 項目について、第 1 因子に負荷量の高かった 6 項目の得点を全体し項目数で割った「情報探索・処理得点」(M=4.28, SD=0.775, $\alpha = .898$) と、第 2 因子に負荷量の高かった 3 項目の得点を全体し項目数で割った「学生生活スキル得点」(M=3.97, SD=0.950, $\alpha = .838$) を作成し、以降の分析に利用した。

表 14 は、昨年 1 年間の学びを通じて身につけることができたと思う技術に関する得点を、専攻別に比較したものである。情報探索・処理得点、学生生活スキル得点の両方とも、専攻間の差は小さいことがわかる（情報探索・処理得点の効果量 $\eta^2 = .011$ 、学生生活スキル得点の効果量 $\eta^2 = .025$ ）。

表 14 昨年 1 年間の学びを通じて、身につけることができたと思う技術に関する専攻別比較

情報探索・処理に関する能力や技術					学生生活スキル			
専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.30	0.783	329	$\eta^2 = .011$	4.23	0.936	329	$\eta^2 = .025$
哲学	4.25	0.944	95		3.78	1.122	95	
日本文学	4.29	0.775	237		3.95	0.816	237	
歴史文化	4.30	0.794	213		3.79	0.937	213	
国際関係	4.28	0.673	301		3.97	0.884	301	
経済学	4.18	0.769	207		3.93	0.901	207	
社会学	4.20	0.669	134		3.98	0.883	134	
コミュニティ構想	4.40	0.777	140		4.09	1.030	140	
心理学	4.44	0.764	213		4.10	0.913	213	
コミュニケーション	4.16	0.793	311		3.89	0.993	311	
数学	4.21	0.895	99		3.65	1.087	99	
情報理学	4.27	0.735	86		3.81	0.990	86	
合計	4.28	0.775	2365		3.97	0.950	2365	

最後に、学年別の情報探索・処理得点と学生生活スキル得点を比較すると（表 15）、4 年次に最も高くなることがわかる。効果量は、情報探索・処理得点で $\eta^2 = .016$ 、学生生活スキル得点で $\eta^2 = .019$ と小さく、学年間の差はほとんど見られない。

表 15 昨年 1 年間の学びを通じて、身につけることができたと思う技術に関する学年別比較

情報探索・処理に関する能力や技術					学生生活スキル			
学年	平均値	標準偏差	人数	効果量	平均値	標準偏差	人数	効果量
2 年次	4.21	0.753	822	$\eta^2 = .016$	3.87	0.891	822	$\eta^2 = .019$
3 年次	4.20	0.757	759		3.88	0.928	759	
4 年次	4.42	0.797	784		4.15	1.005	784	
合計	4.28	0.775	2365		3.97	0.950	2365	